

『保育表現技術』に添えるピアノ指導法の予備的研究

— 保育者養成校における音楽指導の在り方の提案に向けて

後藤紀子 GOTO Noriko

- 1 — 研究の目的と課題
- 2 — 研究方法
- 3 — 結果と考察
- 4 — まとめ
- 5 — 今後の課題

【要旨】2011年から保育士養成課程が『基礎技能』から『保育表現技術』という名称になり、「子どもの表現を広く捉え、子ども自らの経験や周囲の環境との関わりを様々な表現活動や遊びを通して展開していくことが重要」とし総合的な音楽指導が求められるようになった。

本論では、新課程の『保育表現技術』に添える指導法とはどういうことかを分析し、保育者養成校の限られた時間の中で学生が達成感を持ち、より意欲的に授業に取り組める効果的な指導法を探る。この研究は、今後の本格的な研究のために仮説を作る予備的研究と位置づけており、より効果的な指導法を検証する方法としてタイプの違う研究対象A校B校の授業実践を通し検討することで、このやり方が有効であるかどうかを考察する。

本論は、以下の3つの課題を立て実践し考察していく。

- 1. 両手伴奏法による弾き歌いの習得からの展開
- 2. 読譜力の向上と曲構造の把握
- 3. イメージ奏

1 — 研究の目的と課題

1. 本研究の目的

2011年から保育士養成課程が改正された。音楽に関する指導法については、「基礎技能」が「保育表現技術」¹⁾という名称に変更された。本研究は、新課程の趣旨を生かして子どもが音楽活動に取り組めるような指導者をどのように養成したら良いかを検討する。特に、ピアノの初心者が半数以上である養成校の現状を踏まえて、ピアノの弾き語りができるようなプログラムの開発を目指す。その際に、「保育表現技術」の内実を豊かにするため、ピアノの初学者でも達成感を持ち意欲的に取り組める指導法について仮説的な提案を提出したい。

2. 課程改正の要点

従来の「基礎技能」の内容は以下の4項目であった。

- (1) 楽譜を読むための基本的な知識
- (2) 歌い、演奏するために必要なソルフェージュや楽器に関する知識や技能
- (3) 様々な音楽活動を通しての楽しさや喜びの体験
- (4) 子どもの歌、簡易伴奏、ピアノなど楽器による伴奏法など保育実技において必要な知識や技能

新課程の「保育表現技術」はこうなった。

- (1) 子どもの発達と音楽表現に関する知識と技術
- (2) 身近な自然やものの音や音色、人の声や音楽等に親しむ経験と保育の環境
- (3) 子どもの経験や様々な音楽活動と音楽表現を結びつける遊びの展開²⁾

一見して、「楽譜」「ソルフェージュ」や「ピアノ」などの具体的な指示が消えているのが分かる。そして「子どもの表現を広く捉え、子ども自らの経験や周囲の環境との関わりを様々な表現活動や遊びを通して展開していくことが重要である」³⁾と強調され、いかに子どもの発達を考え、生活や環境の中で音に気付かせ、遊びを膨らませ音楽表現として発展させられるかという総合的な音楽指導が求められるようになった。

すでに2004年から、各都道府県でおこなわれている保育士試験の音楽実技試験課題は、「バイエル」や「コールユーブンゲン」などから「弾き歌い」2曲になった。そしてその伴奏楽器はピアノだけではなくギター、アコーディオンも可となった。

このことからピアノの演奏技術が高い保育者よりも、子ども達に歌の楽しさや音楽の豊かさを伝えられる保育者が重視されるようになったと理解することができる。

筆者は元々、子どもと共に音楽を楽しめ、音楽の豊かさを伝えられる保育者の資質を重視して教育内容を研究してきた。今回の改正は、筆者がこれまで取り組んできたピアノ指導法がより新課程に近いことを実感した。

3. 先行研究と筆者の立場

日本保育学会大会発表におけるピアノ指導に関する研究は1985年から2000年まで56件発表されており、2001年から2015年までの発表は81件ある。

内容は、ピアノを弾く時間の調査、晩学者に対してのピアノテクニックをつける方法、バイエルなどピアノ教則本の研究、運指、リズム指導の研究などが中心であった。弾き歌いは重要としているが、楽譜を読んで弾いていく指導法がほとんどであった。その中で、東⁴⁾の研究発表が筆者にとって注目された。東は、左手でベースを押さえ右手でコードを押さえる両手伴奏法が、ピアノ初学者にとって子どもの歌を伴奏する際、より効果的な伴奏方法だと提唱しているが、両手伴奏法のリズムパターンの紹介に留まっている。

2001年からの発表では、弾き歌いのテーマが20件あり、そのうちコードを活用した指導法を研究したものが13件あった。内、筆者のピアノ指導研究も4件の発表を重ねてきている^{5) 6) 7) 8)}。

なかでも細田、笹井、西海⁹⁾はコード伴奏のメソッドについて、彼らが出版した『かん

たんメソッド コードで弾き歌い』¹⁰⁾を使い4年間連続して発表している。ここでのコード伴奏とは、右手でメロディを弾き、左手の伴奏は転回形を使わず基本形を使うということで、学生へのコード理解を容易なものとしている。

このようにメロディを弾く伴奏型が主流であると言えよう。もともと簡易伴奏の譜面も右手にメロディを書いてあるものがほとんどであり、現場でもこの弾き方が定番である。

しかし筆者は、メロディを弾きながら伴奏をしていく方法は効率的な指導法とは考えない。なぜ、東のメロディを弾かない両手伴奏法が受け入れられてこなかったのだろうか。メロディを弾かなければ音程が取れないという考えもあるが、弾かないことでのメリットも多々ある。筆者は、東が提唱した両手伴奏法を中心に指導していくことが保育者養成校の授業に有効だと考える。

筆者は長年にわたりダルクローズのリトミックを勉強し、その中で教会旋法や5音音階、半音階、全音音階などを使い、リズムのトレーニングや身体表現を学んできた。その奏法を児童館の子ども達と遊ぶ中で活用し、養成校の授業の中でも簡単に出来る方法を模索しながら試行錯誤を繰り返し、日本保育学会大会でも数回にわたり発表してきた^{11) 12) 13)}。また、歌遊びの創作本¹⁴⁾を出すなどの活動を長年おこない、10数年前から弾き歌いをしてながら替え歌で遊ぶ活動を養成校でもおこなってきた。子ども達の意見を取り入れるという想定で弾くため、できるだけ簡単に演奏できる奏法を研究してきた。

筆者の主張を確認するために、本研究ではA校B校というタイプの違った2つの養成校を対象とし、そこでの指導法の違いがどのような結果を生み出すかを検討した。

2——研究方法

新課程の「保育表現技術」の理念に沿った指導法とはどういうことかを考察し、より効果的な指導法を検証する方法としてタイプの違う研究対象A校B校の授業実践を通し検討することで、このやり方が有効であるかどうかを考察する。

1. 研究対象校A、Bの概要(表1)

A校(大学・定員30名)は楽器演奏1・2・3(3は選択)、幼児の音楽(それぞれ半期ずつ)は、2年間の授業の中で取り組む。15人が2グループ。筆者が一人で全部担当し本研究のみに採用して指導をおこなっている。

B校(専門学校・定員50名)は、音楽I・II(通年)と、ピアノ奏法I・II(通年)の2年間の授業がある。ピアノ奏法I・II(表1の網掛け部分)は、7~8人で受けるピアノのレッスンであり教員は6名、ここの部分はA校にはない。つまりB校はA校の2倍の時間を音楽にあて、教員の数もかなり多い。筆者の担当は音楽I・IIであり、45分歌唱指導(別の教員)、45分弾き歌い(筆者)、25人2グループでおこなっている。ピアノ奏法のレッスンでは、長年伝統的なピアノ教則本を使った指導をしており、B校にとって目新しい筆者の

授業は、例外的な教育方法を取っていることになる。

どちらも 2013 年前期から後期におこなったデータをもとに分析する。

各学校とも ML 教室で授業をおこなう。A 校では 3 分の 1 弱が男子学生であることもあり初学者が多い。B 校は女子のみであり、比較的ピアノ経験者が多く、音大を出ている学生もあり、既卒者が半数以上、年齢も様々である。

A 校と B 校、かなり音楽における指導体制や音楽経験値の異なる学生に、以下の 3 つの課題を立て実践し考察していく。

1. 両手伴奏法による弾き歌いの習得からの展開
2. 読譜力の向上と曲構造の把握
3. イメージ奏

2. 倫理的配慮

学生にアンケートを取る際、事前に研究の主旨・方法・個人名を出さないことなどを説明し、同意を得た。

3—— 結果と考察

1. 両手伴奏法による弾き歌いの習得からの展開

ここでいう両手伴奏とは、子どもの歌を歌いながら両手を使ってピアノを弾く時、右手も左手もコードの音を弾き、旋律を弾かない方法と定義する。

弾き歌いの教材として『幼児のための音楽教育』¹⁵⁾を使用する。この本は、ほとんどの

表1 研究対象校A、Bの概要

A 校		B 校 (A 校の 2 倍の音楽の時間)	
担当	筆者が全部担当	筆者と声楽指導者と時間を分けて担当	他の教員がグループでピアノ指導
1 年 前期	音楽 (楽器演奏 1) [必修] 『BASTIEN PIANO BASICS レベル 2』楽曲を弾きながら音楽構造やコードを学ぶ 弾き歌い指導 C, G, F を使った曲を学ぶ	音楽 I [必修] 歌唱指導 (他教員) 弾き歌い指導 (筆者) C, F, G, G ₇ , Dm, Dm ₇ , Am, Em などを使った曲を学ぶ	ピアノ奏法 I [必修] 各自の能力に合った教材 (ブルグミュラーやソナチネ等) を使いピアノ楽曲指導
1 年 後期	音楽 (楽器演奏 2) [必修] 『BASTIEN PIANO BASICS レベル 2』楽曲を弾きながら音楽構造やコードを学ぶ 弾き歌い指導 C, G, G ₇ , F を使った曲を学ぶ		
2 年 前期	幼児の音楽 [必修] 弾き歌い指導 毎週 1~2 曲の様々なコードを学ぶ	音楽 II [必修] 歌唱指導 (他教員) 弾き歌い指導 (筆者) 毎週 1~2 曲の様々なコードを学ぶ イメージ奏	ピアノ奏法 II [必修] 各自の能力に合った教材を使いピアノ楽曲指導
2 年 後期	音楽 (楽器演奏 3) [選択] 弾き歌い指導 毎週 1~2 曲の様々なコードを学ぶ イメージ奏		

曲にコードが書いてある。15回の授業でしっかり弾いて歌う指導をしていくことを考えると、譜面通りに弾く指導をすると全く時間が足りない。また譜面通りに弾けたとしても伸びやかに歌うのは至難の業である。ドの位置すら知らない学生に曲も教え、さらに新課程に変わった大事な部分「子どもの表現を広く捉え、子ども自らの経験や周囲の環境との関わりを様々な表現活動や遊びを通して展開していくことが重要である」¹⁶⁾を可能にする指導法とは何なのだろうか。

ここでは、両手伴奏法の指導実践例と成果を考察する。

1-1. 簡単両手伴奏法の展開

譜面を読むことより、まずピアノの音を出しながら歌うことに慣れ、自分でもできるという自信を持つことである。目標としては、笑顔で子ども達の方を向きながら演奏でき、弾いて歌う喜びを感じることである。筆者は、歌いながら子どもの顔を見て、臨機応変に子ども達と楽しく遊びを膨らませていける方法として、左手1本指・右手2本指奏法¹⁷⁾という簡単伴奏法を考えた。

1-1-1. 左手1本指 右手2本指奏法の指導法

考え方としては、ギターの伴奏と同じである。コードを押さえ歌を歌えば弾き歌いになるのである。伴奏のリズムパターンの変化や音域を上げたり下げたりすれば歌詞に合わせたニュアンスも出すことが出来る。

①左1本指奏法

『10人のインディアン』を歌い、歌詞を確認する。次に教師が人差し指1本(I)を出したら左手でドの音を、パー(V)を出したらソの音を弾くように指示を出す。歌いながら全音符分伸ばしながら弾く。ここでは、左手のみで単音を押さえるだけなので、歌に意識を向けしっかり声を出すように指導する。

②左手1本指・右手2本指奏法

①にプラスしていく。右手をチョキにし教師が人差し指1本(I)を出したらミソ、パー(V)を出したらファソを弾く。歌いながら両手一緒に全音符分伸ばして弾く。それが出来たら、2分音符に刻み歌いながら弾く。さらに4分音符で左右左右と交互に音を出して歌いながら弾く。さらにバリエーションとして右手2拍目を8分音符に刻んでみる。また終止感を出すために最終小節の3拍目は両手一緒に和音を弾く。

ここまでで『10人のインディアン』の弾き歌いは出来た事になる。ここで「子どものインディアンが来たら？ 部落の酋長さんが来たらどんな伴奏にしたら良い？」と聞いていく。音域を上げたり下げたりしピアノの鍵盤をフルに使い、音色や強弱を意識してやることによりイメージと音を連動させる体験をおこなう。これでもう子どもの前に出て恥ずかしくない演奏になるのである。

同じ2コードで『山の音楽家』もできる。簡単に弾けるだけに、その動物や楽器の音を意識し、音色にまで気を掛け演奏することができる。また簡単だからこそ鍵盤から目を離し一緒に歌う人の顔を見ながら出来るのである。

③3コードの指導方法

『森のくまさん』を②の奏法で歌う。途中、「花咲く森のなか〜」で「か〜」の1小節だけコードが違うことを話す。この「か〜」の1小節のみ弾くのをやめ、あとの2コードで『森のくまさん』を4分音符で左右左右と交互に伴奏をして歌いながら弾いてみる。

以上がスムーズにできるようになったら「か〜」の1小節の穴埋めをしていく。左手はファの音を弾くことを指示し、それができたら右手はファラをつける。その合図を(Ⅳ)とした。

1-1-2. ピアノ演奏に余裕のある学生への課題

ピアノ経験者で余裕のある学生は、右手2本から3本に変え(Ⅰ)の時はドミソ[C]、(Ⅴ₇)の時はシファソ[G₇]、(Ⅳ)の時はドファラ[F]を弾いてみることにする。

また伴奏型・リズムパターンを変えることで、さらに歌詞に合った効果的な演奏ができる次のステップ課題を出している。

①違うコードに置き換える『森のくまさん』

(Ⅳ)のところでベースラインをファファ#ファ#ファと半音上げ、右手もベースが#ファになったら#ファラにし、コードではF→F→F^{#dim}→F^{#dim}となるようにする。

②ベースをあそぶ『森のくまさん』

例えばハ長調(Ⅰ)であればドミソなのであくまでホームはドであるが、ラウンド(ドソドソ)したり、最後のベースラインを対旋律(ソソラシド)にしたり等、いくつか可能性のあるパターンを示し、自分なりの伴奏型を考えさせる。学生達は、色々なジャンルの音楽を聴いており、素晴らしいセンスを披露することが多々ある。

1-1-3. 簡単両手伴奏法の成果と考察

A校のオープンキャンパスに参加したピアノ未経験の高校生が僅か15分で『10人のインディアン』や『山の音楽家』を弾きながら歌えた実践例は数多くある。まずは「できた!」と言う喜びから始めることが大事であると考え。

全く弾けなかった学生が、初めての授業でほぼ弾き歌いできた自信は、学生達の学ぶ意欲を奮い立たせるものとなる。特にA校の初学者は音符も全く教えていない状態だが、指を突っ張りながらも『10人のインディアン』は全員が達成することができる。またB校では、ピアノ奏法の授業で先生から教則本を与えられ、楽譜と格闘している学校である。ゆえに、筆者の指導法である左手1本指右手2本指の奏法は、「ピアノでこんなことして良い

の？」と驚きの声があがり、「これならできる！」と感じるのである。ピアノ経験豊富な学生は、楽譜通りに弾く事はできてもコード奏には慣れておらず、自由にベースラインをアレンジすることは初めての経験であることが多い。伴奏するコードは、1パターンだけではなく、いくつかの可能性をもつものであり、ベースラインを自分なりに変えて楽しむことで音楽を自ら作っていく楽しさを体感することができる。

当初、弾けない学生の為にこの奏法を取り入れていたが、実践していくうちに、ピアノ演奏が音楽的になり歌唱指導も同時にでき、すべての学生にとって新鮮な経験となることが判明した。ピアノ指導は、レベルに分けて指導することが多いが、この指導は経験の差は関係なくスタートラインに立てるところが利点である。また初学者が経験豊富な学生の演奏を聴き、その演奏を目指すことで譜面は読めなくても弾く力が育っていくことも見受けられた。

A校B校共に何の問題も無く全員が弾き歌いをすることができるようになった。この課題は、能力に関係なく集団でおこなう初期のプログラムとして有効であると考ええる。

またさらに歌詞により伴奏形態や音の高低、ボリュームなどを意識して音の出し方を工夫する経験を初期から意識することができたことは、これからの課題につながる重要なポイントである。

1-2. 両手伴奏法の展開

その後の授業で、2つのコード、3つのコードで弾ける曲を出来るだけたくさん弾き歌いをし、歌いながら弾くことに慣れていく。この頃には、かなりの学生が右手C→ドミソ、G→シファソ、F→ドファラのコードネームで和音をつかめるようになっている。この3つのコードが書いてあれば歌いながら次々にレパートリーは広がる。

1-2-1. 3つのコードで弾ける曲のレパートリーを増やし、他のコードにも挑戦する

子どもの歌は、二長調のものが多いため、二長調のコードの上にD→C、A7→G7、G→Fとハ長調に移調して書き込むことでさらに出来る曲は増えていく。

習熟度が上がってきたら、3コード以外のコードも押さえられるようにする。ヘ長調やト長調等の曲も押さえられるようになっていく。よく出てくるコードは、Am・Em・D7・E7・C7・B^b・Gm等であり、これらのコードも覚えていき、弾き歌いのステップを徐々に上げていく。2年間で少なくとも約40曲位は全員楽譜を見ながら弾き歌いができるようになる。

1-2-2. 両手伴奏法とイメージの連動、伴奏パターンを工夫する課題

両手伴奏法で弾き歌いをする、左手でベースラインを押さえ右手は和音を押さえるので、かなり色々な伴奏パターンで演奏することが可能になる。

登¹⁸⁾は、「歌詞から生まれる心的イメージを広げることは学生の感性を引き出す事にもつながるもの」と考える。歌詞だけでなく、音や歌声を聴いて、感じて伴奏づくりに移すこと

は感性を研ぎ澄ますことで可能となる。また子どもの感性を引き出し伸ばすためには、保育者となる学生自身の感性が重要になる。」と書いている。

原曲の伴奏をきちんと弾く事も大切だが、曲によってはその歌詞のイメージに合った伴奏を用いることで、子ども達の表現がより豊かになっていくと筆者は考える。これは、新課程の目標に繋がる大事な部分である。そこでいくつかの曲を独自のアレンジで弾き歌いする試験をおこなっている。学生がイメージして考えた事例をここに挙げる。

例1『夕焼け小焼け』

どんな夕焼けをイメージして弾くかを話してから弾き歌いをおこなう。または夕焼けを絵に描いても良い。

川の土手でおかあさんと手をつないで帰る、家が見えてきたから途中から走って帰る。

などを話してから歌うと、その映像がそれぞれの心の中に浮かぶ事を体験する。

演奏としては、ベースをオクターブにすることでおごそかな鐘の音をイメージする表現や、右手をアルペジオにすることで心弾んだやわらかなイメージを表現できた。色々な伴奏があり、他の人の演奏を聴くことでさらにそれぞれの演奏が多彩なものとなった。

例2『山の音楽家』

動物を考え何の楽器を持つか考える。その楽器のリズムを考え、そのイメージに合った伴奏を演奏する。

山の妖精→きれいなハーブを弾いてみましょう

海のラッコ→お腹の貝を叩いてみましょう

〇〇組の子ども→元気にステップ踏んでみましょう

この曲のように動物やリズムを置き換えて遊べる曲は、色々なパターンを自分の引き出しとして持っておくことが保育者として必要だと思われる。上記のように楽器ではなくステップに替えたり、動物ではなく子どもにするなど独創的なものもできた。「〇〇組のみんな、元気にお歌を歌ってみましょう。」など、現場で使うときの準備をしておくことを伝える。

例3『ふうせん』¹⁹⁾

『ふうせん』の歌は、子ども達に「何色?」「何になったかな?」など投げかけ、子ども達の意見で歌詞を替え楽しんでいく歌である。画用紙の表に好きな色の風船を描き、裏にその風船が何になったかを考え描いて、それを何になったか当てっこをしながら歌うこともできる。このときにそのイメージに合った伴奏で弾けたらその表現は、もっと迫力あるものになるであろう。

課題は、黄色い“ふうせん”が黄色い“ちょうちょ”になるのが原曲だが、これを替え歌にして2コーラスの弾き歌いをする。前奏、間奏は自由だがテンポや音域を変えるのであれば間奏を入れた方が弾きやすいことを伝える。

譜面通りに弾く課題ではないため、色々な伴奏パターンの演奏を聞くことができる。

歌詞の例

1 番 水色の風船ルルルーそっと風にあげたらフワフワフワフワ水色の雨になった

2 番 七色の風船ルルルーそっと風にあげたらフワフワフワフワ七色の虹になった

ポイントは、歌詞を伝えたいときは、ピアノの音を減らすことだと指導している。最後の○○の△△になった。の所では○○と△△が聞こえないとオチが分からない。ここを伝えられなければ全てがつまらないものになってしまう。そういうときは、両手の和音を全音符で伸ばしたままで歌詞をしっかりと歌う。また、替え歌をしたときに、うまく語呂合わせをしないと聞き取りにくいものになる。子ども達の意見を聞き即座に歌詞をはめ込んでいく力も保育者にとって大事な技量である。

1-2-3. 両手伴奏法の展開の考察

学生の伴奏パターンを工夫する演奏は、それぞれが 88 鍵の色々な場所をフルに使っている。キラキラの風船、熱い風船、くにくにくの風船、トゲトゲの風船等どうピアノで音を出すかなど、それぞれが考え、ピアノの技量がない人でもイメージすることが先にあれば、そこに近づけようと考え、インパクトのある演奏ができる。それが素晴らしい音を生み出すことに繋がる。

余裕のある学生は、右手のポジションにより和音の響き方が微妙に違うことに気付かせていく。初めの指導は（ドミソ）の基本形だが第 1 転回形の（ミソド）のポジションは終止感が得られ第 2 転回形（ソドミ）は安定感がある。ポジションによって伴奏のイメージが変わる。歌詞を作ること、どういう音色にするかなど合わせて 1 つの表現になる。

歌詞を替えていく活動は、A 校 B 校共に楽しいものが出来、今後実習でも使ってみたいと声が上がっている。

1-3. 歌の指導

この両手伴奏法は、メロディをしっかり歌わなければ成り立たない。アカペラでしっかり歌える力をつけるための時間は、毎時間わずかでも費やす必要がある。A 校では筆者が毎時間数分発声練習をおこなっている。B 校では声楽の専門の教員が 45 分歌唱指導するため、その成果は大きい²⁰⁾。

1-4. 右手メロディを弾いての伴奏

保育者のための簡単伴奏譜は、ほとんどのものが右手はメロディになっている。学生が実習先からコピーの楽譜をもらってくるのもこれらの楽譜である。両手伴奏に慣れている学生は、ここで戸惑うことになる。現場の先生は、この通りに弾くことを要求してくるケ

ースが多いのである。このため、A校では両手伴奏しか指導していないため『朝の歌』『おべんとう』『おかえりのうた』などは、楽譜の伴奏通りの練習（メロディを弾く伴奏）をしている。これは、現場対策である。

メロディを弾いて伴奏するのと両手伴奏をするのでは、それぞれどんな利点があるか、「伴奏指導、旋律の有無」²¹⁾では、学生アンケートを取りピアノ演奏のレベルごとに集計し考察した。

1-4-1. 集計結果

A校1年28人2年17人、B校1年41人2年33人合計119人にアンケートをおこなった結果、『両手伴奏が弾きやすい』が64%、どちらとも言えない20%、弾きにくい16%、となり、メロディを弾かないで両手でコードを弾くやり方が弾きやすいという結果が出た。『バリエーションをしやすいか』の質問には、両手伴奏では42%、メロディを弾く方は17%、『子どもの顔を見ながら歌いやすいか』の質問にも両手伴奏の方が43%、メロディは14%、が弾きやすいと答えている。その他の人は、どちらとも言えないにチェックをつけている。しかし、音程が取りやすいかの質問に関しては両手伴奏が28%、メロディを弾く方が72%と圧倒的にメロディを弾いた方が取りやすいと感じており、特に音程が不安定な学生はメロディを弾くことにより歌が助けられるということになる。

また、ピアノが得意か不得意かで比較したが結果に大きな差はない。

1-4-2. 学生の意見

自由記述の欄には、音程はメロディを弾いた方が取りやすいが、ピアノに集中してしまいがちになるので、両手伴奏の方が子どもと楽しんでいる感じがする。また、逆に実習や実際の現場では、両手伴奏は見られなかったので、メロディを弾いた方が良いという意見も出た。

1-4-3. 「伴奏指導、旋律の有無」の考察

はじめて子ども達と歌う曲は、ピアノの音程の支えがあった方が子ども達も音程が取りやすいだろう。こう考えると当然両方出来た方が良いが、そこが難しいところである。筆者は、メロディを弾くのであれば、左手はベースの一音でも良いと思いそのように指導している。メロディを間違えると歌も止まってしまうことが多いので弾く力がない学生は、極力負担を少なくすることが大事だと考える。

左手で伴奏し右手でメロディを弾き、さらに表情豊かに子ども達の方にも目線を配り弾いていく時間を考えると、両手伴奏で次々と弾ける曲を増やしていく指導の方が、身につくものが遙かに多いと筆者は考えるのである。

最終的には、子ども達と音楽を楽しむとき、伴奏の形態はどういう形であっても豊かな音楽を伝えられるのであれば構わないと思う。学生が卒業後保育現場で課題を与えられた

とき、自分の力量にあった表現方法でより音楽的な伴奏を自分の力で解決できることを身につけてもらいたいと思う。また、子ども達のはじめて聴く曲であればメロディを弾いた方がわかりやすいし、知っている曲をもっとリズムカルに歌って欲すれば両手でコードを弾きリズムを楽しく刻んでいった方が効果的であろう。

これらの集計結果ではでピアノ経験年数が少ないA校の方が両手伴奏に頼っていることは、はっきりしているが、弾ける人たちにとっても両手伴奏がしやすいという結果はとても興味深い。

1-5. 両手伴奏法による弾き歌いの習得からの展開の考察

保育者を目指す学生は、取得単位も多くピアノばかり練習しているわけにはいかない。また、あまりにも高いハードルでは、やる気が失せてしまう。簡単に出来る両手伴奏は、少しの練習でも目に見えて効果が出る。「これなら練習すれば必ず出来る！」と思えば初学者でも努力をする。

2年目になると毎週少なくとも1曲の課題を出し、合格しないと単位は出さない。曲のイメージを表現し、にこやかに子どもに語りかけるように弾き歌いが出来れば花丸がもらえる。もちろん止まらずに弾くことが条件である。多くの学生は花丸を取るまで何回か挑戦している。この頑張りが弾き歌いの力を伸ばすことに繋がる。また毎回チェックをしていくことで、わからないままにすることがなくなり、落ちこぼれを作らないことになる。弾ける人が弾けない人をサポートする姿もよく見かけられ、教える側も勉強になる。最近では、サンプル映像を動画で撮影し家で練習する学生も増えた。要望があれば動画撮りにも随時答えている。

また、演奏技術に自信のある学生はベースラインを動かしたりコードを分解したりしている。アドバイスとしては、右手はコードで左手は原曲の楽譜のベースラインを参考に弾いてみるなどである。その結果、歌詞によりベースラインの変化やリズムパターンを変える工夫も多々見られた。

この結果2校の学校の学生すべてが課題をクリアすることができた。A校はB校より音楽指導の時間は少ないが、両手伴奏の演奏技術はどちらの学校も同じように成果を上げることができた。

今後社会に出たときに、もしはじめての曲と出会っても、教則本の最後のページには、コード表が書かれており、わからないときにはここを見ることがや、コードの付いている楽譜を探せば何とかなる、という自分で解決する力を学んで欲しいと願っている。

2. 読譜力の向上と音楽構造の把握

弾き歌いの指導と並行して初級レベルのピアノ演奏をする力をつけることも大事だと考える。メロディを解読する力や譜面を見て弾く最低限の力は育てたいところである。

教材は『BASTIEN PIANO BASICS レベル 2』²²⁾を使用する。この本を使う理由は、簡単

なピアノ曲と一緒に楽典がわかりやすく載っていることである。音程、ハ長調・ト長調・ヘ長調・ニ長調・イ長調・ホ長調の音階、主要3和音（属7含）、転回形、カデンツなどが絵入りで大きく書かれている。これらは上記のコード奏法による弾き歌いの時も活用でき、コード奏法としっかり関連づけてピアノ指導ができる事が大きな利点である。

またピアノを達者に弾ける学生でも楽典をわかっている学生はほとんどいない。弾ける学生にとってはこの曲集は易しいが、伴奏形をアレンジし元気にしたり悲しくしたり、身体活動をイメージして弾いたり、移調の課題を出すことにより保育現場に活かせる演奏指導ができる。何より曲がポップで楽しいため、学生が積極的に弾ける曲を増やしていけることである。

また基本形を使った曲、転回形を使った曲のニュアンスの違いも、それぞれの曲で比較ができわかりやすい。初心者のための本なので、初学者はもちろんだが、ピアノ経験者でも課題の与え方により十分活用でき使いやすい本である。1年終了時には、3分の2の学生が最後の曲「The Entertainer」を弾けるようになっている。またこの曲が弾けるようになりたいと頑張っている学生も非常に多い。

ピアノ経験者に対してのこの授業の目標はさらに難しい曲に挑戦することではない。今持っているピアノ技術でどれだけ子ども達を引きつける演奏や工夫ができるかである。

3. イメージ奏

子ども達は遊びの中で、いろいろな空間に行った気分になったり変身したりする。そんな遊びの中に、そのイメージに合った音を奏でていけば、子ども達の活動はもっと想像豊かなものになるだろう。また劇遊びの中での音楽も、子どもの動きに音楽が合わせられれば、子どものそのままの表現を観客に伝えられるだろう。そう考えると、ピアノは太鼓などの打楽器より音の高低や強弱なども豊富に作り出せる楽器である。それを怖がらずに思いつき自由演奏できれば新課程の目標に添った指導が可能になる。

そこで、子ども達と劇遊びをするときに、その雰囲気や音楽や効果音などを動きに合わせて音が出せる技術を学ぶ方法としてイメージ奏というものを実践している^{23) 24) 25)}。

3-1. イメージ奏の定義と課題の出し方

ここでのイメージ奏とは、半音階、全音音階、黒鍵のみペンタトニックの3つのモードを使う演奏のことである（図1）。

それぞれのモードを使って弾くということは、機能和声のようなルールがなく、何の音で終わらなければならないという事もないので、とても楽な即興演奏である。

3-2. イメージ奏の考察

この演奏は、譜面なしで演奏しているので、ピアノの演奏技術がない学生にとっても思いを表現し伝えることができる。また、場面のイメージをもって弾くことで、柔らかい

音、強い音など繊細にピアノの音を奏でることも出来る。

子ども達の変身ごっこや劇遊びの効果音として、また魔法をかける効果音としてもこのイメージ奏は使える。童話のオオカミが来る不安感や近づいてくる怖さの表現、悪者が登場するシーンや嵐、雷などの天候の変化なども、ピアノが苦手な人でも自由につくることができる。また長さを自由に調整できる利点がある。

ただ、面白いことにこの取り組みは、B校のピアノ演奏が達者な学生は、苦手なことが多いのである。譜面を見て弾くことになれている学生は、イメージで即興していくことに不安を覚えるのだろうか。もともと、譜面を読むのが苦手な学生は、自由に弾ける楽しさを満喫しているように思う。

この経験を生かして保育現場で少しでも挑戦して欲しいと願う。

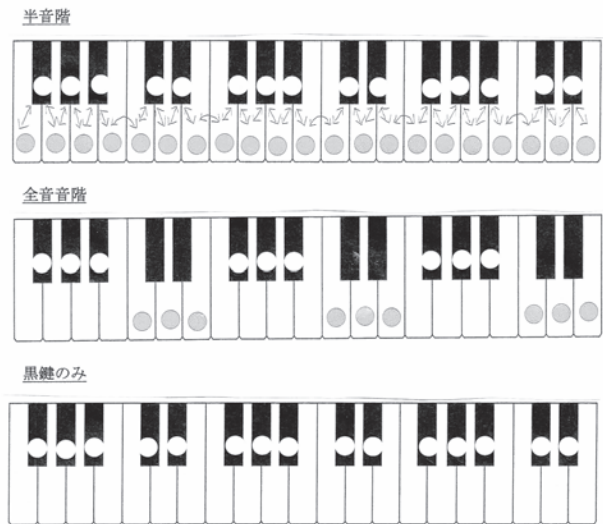
4—— まとめ

両手伴奏法の良さは簡単に弾けることであり、それは子ども達とコミュニケーションを取りながら歌えることに繋がる。また余裕があることで曲をアレンジし歌詞に合った伴奏を工夫でき、歌で遊ぶことが可能になる。さらに音色にまで意識し奏でることができる。メロディを弾くことに気を取られていてはできないことである。

歌は、無限に想像力を広げられる無形文化財である。毎回同じ伴奏でなく歌詞のイメージで音色が変わっていく体験をした子どもたちは、新たな想像力を引き出し、主体的に歌で遊び楽しむであろう。これは、新課程の「保育表現技術」²⁶⁾の「子どもの経験や様々な表現活動と音楽表現とを結びつける遊びの展開」²⁷⁾に結びつく。またイメージ奏は、「身近な自然やものの音や音色、人の声や音楽等に親しむ経験と保育の環境」²⁸⁾に添えるものと考えて。本論で述べた3つの実践方法は、はじめから子ども達の顔をイメージしながら進めてきた指導法であり新課程に添う指導法として有効と考える。

また今回A校B校の学生に3つの課題を立て実践してきたが、1の両手伴奏法の弾き歌いと3のイメージ奏に関しては、初学者も経験者も同じように全員到達できたことが大きな成果と言える。B校の半分の時間しかないA校でもほぼ同じ課題をこなせたことも注目すべきことである。2の譜面を見て弾くピアノ演奏は個人差があり差は歴然としていたが、

図1 イメージ奏鍵盤図



譜面を読んで最低限弾く力がつけば問題ない。これらの指導法は、レベルに関係なく 20 人前後の集団で一斉におこなえる課題である。もちろん弾ける学生はさらに工夫をして完成度の高い演奏が出来たが、初学者でも子ども達の前で十分通用する弾き歌いやイメージ奏をする力がついた。さらに、色々なレベルの人たちがいることで相乗効果が生まれたことも大きな特徴である。

また、両手伴奏で弾くか旋律を右手で弾くかの論争は色々な所でおこなわれているが、筆者は以上のことから両手伴奏の方が良いと確信している。その理由は、筆者が長年おこなっている児童館での活動や知的障がい者のアンサンブル活動の中にも見られる。

一例として、集団遊び『ロンドン橋』では、軽快なピアノ伴奏があるとさらに活気が出て楽しめるものと考えている。最初はメロディを弾いて伴奏していたが、子ども達はたくさん走りまわるのでだんだん声が出なくなる。ある時メロディを弾かない伴奏を試みたら、子ども達が歌うようになった。ピアノのメロディがあれば歌う必要が無いと子どもたちが思うことに気がついた。皆で歌って展開するからこそ楽しい歌遊びになるのである。

もう一例を挙げると、知的障がいの子も達との歌の場面で、よくリクエストが上がるのは『大きな古時計』『となりのトトロ』『手のひらを太陽に』等だが、これもメロディを弾きながら筆者も気持ちよく歌っていた。しかしふと気がつくと彼らのささやく声を聞き逃しているのではないかと思えてきた。そこでメロディを取った伴奏をしたところ、今まで気付かなかった彼らの声を聴くことができた。さらに彼らの声がお互い聞き合い寄り添って行く変化が見られたのである。伴奏のピアノの音で彼らの声をかき消していたのだ。お互いの声が聞こえると人は合わせようと試みる。その変化がとても楽しいと思うのが合唱でありアンサンブルである。

子どもの声も同じであると思う。もちろん初めての曲を紹介するときはメロディを弾きながら歌うことも必要であるが、歌えてきたら歌詞に合った演奏を両手伴奏で弾くことでイメージを膨らませ遊んでいけることが出来るを考える。

しかし両手伴奏やイメージ奏など、実際の就職先にはまだなかなか通用しないのが実態である。譜面通りに弾くというピアノ指導の固定観念からもう少し自由な発想を現場の保育者にも持ってもらえることを心から願う。

5 ― 今後の課題

今回タイプの違う 2 校の実践を予備的研究としてまとめた。両手伴奏の優位性に関しては、①未経験の学生が取り組みやすく発展できること②ピアノ経験者に対してもアレンジしていく楽しさを知ることで音楽構造を学び深めていくことができる。③ピアノ経験年数にかかわらず、子どもとコミュニケーションをとりながら進められるので、関係が良くなり共に音楽を楽しめる弾き歌いになること。またイメージ奏においては①お話の中に効果

音的に音楽を入れることで臨場感が出て、ごっこ遊びや劇遊びにも使っていけると考えられる。

今後それぞれについて、受講生からインタビューや質問紙を工夫することで丁寧にデータを取り、この仮説を実証していきたい。また、弾きながら歌えるための歌唱指導の工夫についても研究を重ねていきたい。

《引用文献》

- 1) 保育士養成課程等の改正について (中間まとめ) (2010.3.24) 保育士養成課程等検討会 1部 1. (4)③
- 2) 前掲 1) 別紙 2「教科目の教授内容改正案」【保育表現技術】〈内容〉2. (1)~(3)
- 3) 前掲 1)
- 4) 東ゆかり (1994) 子どもの歌の伴奏づけについて—保育者養成校での実践を通して—, 日本保育学会 第 47 回大会研究論集, 622-623
- 5) 後藤紀子 (2007) 保育者養成校におけるピアノ指導研究, 日本保育学会第 60 回大会発表論文集, 824-825
- 6) 後藤紀子 (2008) 保育者養成校におけるピアノ指導研究②—即習『左手 1 本指・右手 2 本指奏法』, 日本保育学会第 61 回大会発表論文集, 364
- 7) 後藤紀子 (2013) 弾き歌いの取り組み—声から声へ『聞いて・覚えて・歌う』—, 日本保育学会第 66 回大会発表要旨集, 507
- 8) 後藤紀子 (2014) 保育者養成校におけるピアノ指導研究—伴奏指導、旋律の有無—, 日本保育学会 第 67 回大会発表要旨集, 513
- 9) 細田淳子、笹井邦彦、西海聡子 (2011-2014) 保育者養成教育における弾き歌い, 日本保育学会第 64-67 回大会発表要旨集 209, 350, 208, 219
- 10) 細田淳子、笹井邦彦、西海聡子、悠木昭宏 (2011) かんたんメソッド コードで弾き歌い, カワイ 出版
- 11) 前掲 5)
- 12) 後藤紀子 (2010) 保育者養成校におけるピアノ指導研究③—絵本からのイメージ—, 日本保育学会 第 63 回大会発表要旨集, 515
- 13) 後藤紀子 (2015) 保育者養成校におけるピアノ指導研究—イメージ奏の取り組み②—, 日本保育学会 第 68 回大会発表要旨集, 87
- 14) 後藤紀子 (2008) いっしょにあそぼう! みんなのあそびうた, アドグリーン出版
- 15) 神原雅之、鈴木恵津子監修・編著 (2010) 幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育, 教育芸術社
- 16) 前掲 1)
- 17) 前掲 6)
- 18) 登啓子 (2010) 養成校における弾き歌いの指導について—歌詞から生まれるイメージを大切に— 弾き歌いの指導事例を通して—, 埼玉学園大学紀要(10), 325-332
- 19) 湯浅とんぼ詞, 中川ひろたか曲 (1994) ジョイキャンブカワイ出版, 159
- 20) 前掲 7)
- 21) 前掲 8)
- 22) JAMES BASTIEN, BASTIEN PIANO BASICS ピアノレベル 2, 株式会社東音企画 (日本語版)
- 23) 前掲 5)
- 24) 前掲 12)

- 25) 前掲 13)
- 26) 前掲 2)
- 27) 前掲 2) 〈内容〉 2. (3)
- 28) 前掲 2) 〈内容〉 2. (2)

付記：本論文は、日本保育学会第 60 回大会口頭発表、第 61 回大会口頭発表、第 63 回大会ポスター発表、第 66 回ポスター発表、第 67 回ポスター発表、第 68 回ポスター発表、の内容を加筆、修正したものである。

【ごとう のりこ・和光大学現代人間学部心理教育学科准教授】